

宣教ツアー中盤では、チェンライで宣教の働きを担われている平山先生を訪ねました。

平山先生ご夫妻は、「北タイのアカ族など少数民族に対して、キリストの愛の精神に立って自立支援の働きをされています。他にも、山岳地帯の村々や教会・里子施設などをサポート。言葉や音楽を教えるボランティア活動。クラフト販売による婦人自立支援。日本人とアカ族のユースのための異文化交流・ワークキャンプなど」、そのお働きは多岐にわたっていました。最近では、2017年には、チェンライみぎわファンデーションというNPO法人を立ち上げ、少人数制で孤児のための家の運営を始められました。今回のツアーでは、約3日間、先生自らハンドルを握って地域の小学校や、アカ族の教会、アカ族クリスチャンが営むコーヒーショップ、主に未成年の女子を保護する施設などを案内してくださいました。

特に、今回は「新型コロナウイルスが蔓延し始めたタイミング」ということもあって、「イエス様の再臨」が近いことを悟られていた姿がとても印象的でした。また、先生から話しを聞くまで知らなかったのですが、アフリカでバッタが大量発生し次第にアジア圏に移動してきている、というニュースが報道されたようで、平山先生はすぐに食糧危機に陥ることを悟られ、少人数制の孤児の家の庭に畑を作ることを決めたそうです。バッタのニュースも聞いて、あ、本当に今、聖書に書かれてる通り、終末の時代を生きてるんだということに目が開かれました。

みぎわ寮という場所では、様々な事情で家族や村に止まることができなくなった数人の孤児が一つ屋根の下で衣食住を共にしながら、神様を賛美礼拝しながら過ごしています。

アカ族の教会では、青年クリスチャンとの交流を通して、同じ神様を見上げる時間を持ちました。最後に、日本語で「君は愛されるため生まれた」という賛美を一緒に心一つにして賛美しました。

チェンライのドイチャンという山には、アカ族のクリスチャンの一人がコーヒーショップの経営をされています。山で暮らす人々は自給自足の暮らしていて、収入を得られる仕事に就くのは大変なことだそうです。そこで、同じアカ族の人々に対して働く機会を提供することを神様に示されたのがきっかけだったようです。

ニューライフセンターというところは、虐待やアルコール中毒・ドラッグ中毒などの課題がある家庭に暮らす女の子を対象にした保護施設です。危険と隣り合わせにいる女の子が、クリスチャンのスタッフのケアを受けながら生活をしています。

たくさんにミニストリーに関わられている平山先生ですが、どの場所に行っても全く人見知りせず、むしろ自分から話しかけに行くほど社交的で気さくな先生です。その姿に、神様の暖かな愛を感じずにはいれませんでした。少数民族の中には、複雑な経緯によって国籍が与えられていない方々も多くいます。また、少数民族を理由に不当な扱いを受けることもあることも聞いています。また、それを当たり前なことだと思い込んで諦めてしまっている人々もいることと思います。

そんな現状の中を共に歩まれる平山先生の存在が背後にあることが、どれほど大きいものであるか。そして、それが安心をもたらすものとなっているかを思います。先生の姿から、愛の天の父なる神様を見たような気がしました。おそらく、平山先生は幼子のような純粋な信仰を持ち、すべてのことを神様に明け渡し委ねきっておられるからこそ、これまでの働きを神様から任されてきたのだと思います。

イエス様の再臨を覚えつつ、私自身も幼子のような純粋な信仰を持って歩みたいと願わされました。

「生まれたばかりの乳飲み子のように、純粋な、霊の父を慕い求めなさい。それによって成長し、救いを得るためです。」 1ペテロ2：2